

---

デジタルパンク通信 第三話 2000年5月号

---

Q 質でしょうか。量でしょうか。

A 量です。

ガングロというのかヤマンバというのか、要するにあいつらだが、スゴイのは、ああしてなかったらあの顔はやり場に困るじゃないかということをよくわきまえてる、そういうことではなくて、スゴイのは、親指ひとつで歩きながらメール打つケータイ術で、日本女性が紫式部以来1000年ぶりに世界文化をリードしている、私がそう言うのと少し前まで大笑いされたものだが、ちかごろは真顔で同意されたりするのでホント困る。

連中のこづかいがケータイというネットワークに食われ、CDやマンガというコンテンツがそのあおりを食っている。問題だ。だが連中、チャパツの恋人とのクダラネー会話にゼニ使ってる訳だ。CD作るプロは、チャパツのクダラネーに、サイフの奪い合いで負けているのだ。ナサケネー。どうやら連中、これからは誰でも情報をクリエイトし、発信するというウェブ時代が来ることを、本能的にもう実践してるんだな。

10年前、郵政省でCATVと衛星を担当していたころ、私は当時の花形ハイビジョン派と対立した。CATVや衛星はチャンネルを増やすことが目的で、ハイビジョンはキレイに見せることが目的。キレイな分、電波を食い、チャンネルが増えない。量と質の対立だ。ゼツタイ量だよ。量。オーディエンスが選べるようにすることだよ。クリエイターが流通チャンネル持てるようにすることだよ。オレが放送局になれるかもしれないという夢を見せることだよ。

それから5年たって、ハイビジョンは息をひそめ、インターネットが出てきた。チャンネル数が無限大になった。多チャンネルが無限チャンネルになるというのは、量的な変化を超え、質的な変化となる。

ここで必要なのは、通信と放送の融合というやつだ。説明は省くが、その本質は、全国で時々刻々と生まれるテレビやラジオの番組をインターネットで流すことにある。これはまだこれからの話で、完成まであと10年はかかる。デジタル放送というのは、これをやるためにある。デジタル放送で先行したアメリカは、どこでどう間違ったか、HDTVに力を注いでしまっていて、テレビとインターネットの結合がなかなか進まない。日本にとってはチャンス到来だ。

チャンネルが無数になる。全世界で時々刻々とウェブのコンテンツが生まれるということだ。これをどう活かすか。無限の情報の海をどう泳ぐか。どう選び、どう捨てて、どうつなぐか。つないで混ぜて作って見せる。つまり「リンク」という表現が大切になる。編集、である。

クラブのDJは、レコードというコンテンツを選び、組み合わせ、自分の表現とすることで、客の体を揺さぶる。これぞ編集の表現。情報を「作る」というクリエイティビティーは永遠に大切だが、「選ぶ」「つなぐ」「混ぜる」という編集能力はそれと等価の重要性を持ってくる。目利き、耳効き、がエライ人になる。とても健全なことだ。

---